

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	訪問リハビリを長期に利用したケースを振り返って
演者名	古屋 聡 1) 岡 由利子 2) 精進 美和 2) 小林 早苗 2) 生田 善之 2)
所属	1) 山梨市立牧丘病院 整形外科 2) 山梨市立牧丘病院 リハビリテーション科

目的:過去 2 年間に訪問を終了したケースから 2 年以上の利用者を振り返り、長期の関わりの中でどのような役割をもてたか検証した。

調査方法:平成 24 年 10 月から、平成 26 年 9 月の 2 年間に当院訪問リハビリを終了したケースを調査した。対象数は 23 名だった。今回その中から 2 年以上継続して訪問した 6 名について、関わりを振り返った。

結果:6 名の訪問期間は 8 年 3 ヶ月から 2 年 7 ヶ月だった。

訪問の主な目的は、痛みの軽減 2 名、進行性疾患ではあるが、機能の出来るだけの維持 2 名、脳梗塞後の機能維持と介助量の軽減 1 名、ほぼ寝たきりだが、介助量維持が 1 名だった。

終了の理由は、肺炎で入院後に死亡が 2 名。骨折で入院後施設入所が 1 名。機能低下で入院後施設入所 2 名。家庭の事情 1 名だった。

経過の中で、福祉用具の選択や、環境整備への助言、入院の援助がされていた。また、発言にも変化が見られた。

考察:2 年以上関わった 6 名を分析すると、身体機能レベルも、訪問目的もばらばらだった。機能維持ができたかを考えると、年齢が高くなる中、機能が低下したり、進行性の疾患により動けなくなったりしたケースが多く。維持できていたのは 1 名だった。

しかし、常に状態変化を見ているので、変化に合わせて福祉用具の導入や、環境整備を行うことはできていた。また、リハビリの特性として、最低週 1 回・長時間本人に接しているのも、本人の思いを聞き出しやすく、生活歴や、考え方などもわかってくる。高齢になるに伴い出来なくなってくる事を補う方法を一緒に考えるとともに、出来なくなってくることを受容していくための、精神的援助にもなっている。